

- * 「お願いです。兄弟たち。私のようになってください。私もあなたがたのようになったのですから。」(ガラテヤ4 : 21) とパウロは言う。彼はガラテヤ人に福音を伝えるためにガラテヤ人ようになった。ガラテヤ人の立場に立って考え行動した。パウロは肉体的な弱さを持っていた。目が悪かったことも考えられるが、マラリヤにかかっていたとも言われる。しかし、ガラテヤ人たちはパウロを歓迎してくれた。「わたしの恵みはあなたに十分である。というのは、私の力は、弱さの中に完全に現れるからである」(Ⅱコリント12 : 9) と言われたイエスの言葉によって、パウロはむしろ弱さを誇る信仰の持ち主であった。クリスチャンとは「自分の弱さを認め、神様のゆだねる人」のことであると言えよう。
- * しかし、ガラテヤの信徒たちは、せっかくイエス・キリストの救いにあずかることができたのに、今はすっかり変わってしまった、もとに戻ってしまったとパウロは嘆く。福音をまっすぐに伝えたパウロが悪かったわけではなく、原因はユダヤ律法主義クリスチャンの熱心さに負けてしまったからだという。正しくない熱心は危険である。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです。」(ガラテヤ2 : 20) このようになるまで成長してほしいが、逆戻りしている状況では「生みの苦しみ」は続けなければならない、という。パウロは、ガラテヤ人だけでなく、かつて福音を伝えて信じるようになった人々のことをいつまでも気にして、信仰の成長を願っている。大伝道者であると同時に大牧会者でもあったことがわかる。その根底には強い愛があった。愛するがゆえに敢えて「こんな(厳しい)語調で」話をせざるを得ない、と嘆く。
- * 私たちはどうか。信仰を持つ前に逆戻りしていないだろうか。信仰は成長しているだろうか。成熟に向かっているだろうか。成長をはばむことの一つは、ガラテヤの信徒が惑わされていた「律法主義」あるいは「行い主義」といってよい。律法を守ることや良い行いをすることは大切なことだが、そうしないと救われないとか、決められているからとか、といった動機ならば、間違っている。救われた恵みの喜びの結果、感謝して行いに励むようになるのである。もう一つは、救われたので、自分の思うままに生きればよいと考える人は、自分が相変わらず罪人であることを忘れて、自己中心の生き方から神中心の生き方に変わるのが信仰の成長、成熟に必要なことである。